

新指導要領に準拠する古典教材の構想

～高学年児童のための「源氏物語」の学習～

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for "The Tale of GENJI"

Masanori Furuta

【はじめに—新指導要領との関わり】

先般、『小学校学習指導要領解説 国語編』（東洋館出版社）が公刊された。追って「新指導要領」に準拠した国語教室の実践構想も各地で本格化しよう。「新指導要領」じたい現行の理念や枠組みをおよそ継承しているから、学習活動や支援方法などに大きな改訂は求められまいが、そのなかでも新規的の要素と言うべきは、やはり古典教育の導入に伴うあれこれということになる。すなわち「伝統的な言語文化に関する事項」に関わる諸事である。

前掲書に「国語科改訂の要点」を示して次のように言う。

伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している。例えば、低学年では昔話や神話・伝承など、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げている。

また具体的な学習活動の展開を示して次のように言う。

低学年では、昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること、中学年では、易しい文語調の短歌や俳句につい

て、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすることや、長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと、高学年では、親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読することや、古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ることを示している。

一読、まさに「話す聞く古典・声にする古典」の教育実践を通じて、現行中学校指導要領にいうような「古典に親しむ」という目標を達成しようとするものと見える。「中高生の古典離れ」はつとに解決を求められてきた課題だが、それに対する取り組みを、この際、初等教育段階から始めることで解決しようという意図があるのだろう。

「古典離れ」に関して、藤原(2004)は、「言語抵抗が引き起こす学習上の困難」が生徒達の間に着しいことを指摘した¹⁾。なるほど、論者の眼前にいる学生達が「古典嫌い」を公言しながら「文法学習への拒絶」や「語釈・註釈への辟易」を言い募るわけである。そのような「言語抵抗に発する古典嫌い」を招く一因として、中等教育に今日主流の古典教育が「読む」活動に傾きすぎる面がある、と論者には思われてならない。「古典の授業」と言うときに漠然と意識されるそれである。そのような「読む古典」の方法論は、小学校児童のための古典導入教育を求めようとする今、やはり採りにくいのではないか。そのような問題意識・立場から、「新指導要領」が「話す聞く古典・声にする古典」を提供しようとする試みを高く評価したい。

【「源氏絵」の学習材化と期待される効果】

「話す聞く古典・声にする古典」を実現するプログラムとして、小稿では高学年児童を対象として、石山寺蔵「源氏物語画帖四百画面」を素材とする授業提案を示したい。眼目は、古典の文章（「源氏物語」）の学習に絵（「源氏絵」）を援用しながら、「見る・話す・聞く」活動を通じて古典学習を展開しようとする点である。言わば、古い伝統的芸能でもある「絵解き」を今日の国語（古

典) 教室に応用しようというものである。



およそ「話す・聞く」活動を活性化する支援として、映像の利用(「見る」)が効果的であることは今や広範な理解が得られることだと思われる^{*)2}。論者もまた、それを古典教育に援用する構想を提案したことがある^{*)3}。詳細はそれらを参照していただくこととして、ここでは簡略に、古典教育における「見る(絵を読む)・話す・聞く」活動の諸相と学習効果をまとめておきたい。

まず「見る・話す・聞く」の学習活動は下記各条のごとく展開されるだろう。

- ①描かれた人物や景物をゆっくりと観察すること
- ②詞書等を踏まえた適切な学習支援を得て、場面の様子を想像すること
- ③発見したことや想像したことを他者に話すこと
- ④他者が発見したり想像したりしたことを聴くこと
- ⑤話したり聴いたりしたことを踏まえてふたたび絵を観察し、新たな知見を得ること
- ⑥その上で文章を読み、古文の表現の特徴や面白さを知ること
- ⑦「絵解き」が創造的な言語体験を生む文化的システムであることを知ること

すなわちこのプログラムは、学習者に「古典絵画(源氏絵)を観察し、そこから自分なりに考え、話し、聴き、再び考えること」を求め、それを通じて大体的内容を捉えた後に「古文(源氏物語)に出逢うこと」で、その「文章表現の面白さや個性を発見」してもらおうとするものである。言い換えれば、まず「絵解き」を楽しみながら物語理解のスキーマを活性化し、次にそのスキーマを駆使して文章を読むことでより多様で豊かな古典体験・古文理解を可能にしようというのである。

また、それらの過程で実現される教育効果は次のごとくである。すなわち学習者は、認知的実践(①②⑤⑥)・実存的实践(②⑤)・社会的実践(③④)・評価的实践(⑥⑦)を展開することになり、それを通じて、対事意識(作品や

作者に向かいあう）・対自意識（自分自身に向かいあう）・対他意識（他者に向かいあう）・対言意識（言語空間そのものの価値に気づく）を活性化することになる⁴⁰。およそコミュニケーション教育の要諦がすべて包含されている。これが、「見る・話す・聞く」活動を通じた古典教育の諸相と期待される教育的効果の概要である⁴⁵。

敢えて言うが、「音読・暗誦指導」との要請を承けて「読書百遍、意自ずから」的なやみくもな音読・暗誦活動がイメージされてしまうとすれば、それは誤解というべきである。むろん「読書百編」の効用は決して小さくはないけれども、やはり「伝え合う力を高める」という国語科の大目標に従う古典教室である。古文・漢文をただ音読・暗誦すればよいというものではない。児童相互の「交流」を誘発する素材・学習活動となるよう留意しなければならない。あくまでも児童相互の「交流」を活性化しながら、「内容の大体を知り」、その中で「音読すること」が求められている。小稿が上記のようなプログラムを発想する所以である。



このように絵を援用する古典教育を企画するとき、実は「源氏物語」は恰好の素材である。その享受史を辿って「源氏」ほど絵とともに読まれた作品はないと言われるほどに、その文章と図像の関係が密接だからである。「源氏物語を読む」という言語活動は「源氏絵を読む・源氏絵を解く」という言語生活の楽しみに還元されるのであり、さらに「絵解き」という芸術的活動を楽しむことに通じるのである。「伝統的な言語文化に関する」と言う以上、学習活動の対象は言語だけではあるまいから、その意味でも「源氏」は恰好の素材である。ちなみに高学年児童には社会科の学習などを通じて親しみのある作品もある。古典文学の第一ということは言うまでもない。また本年が「源氏」千年紀だということも好都合と言えなくもない。

【「源氏物語画帖」と「朝顔（六）」】

小稿が学習素材として取り上げる石山寺蔵本「源氏物語画帖四百画面」は、

先年美しい影印が公刊されて利用しやすい。その資料性についても綿密な研究が進んでいるので、児童向けに利用するにも不安がない。⁶⁰

その絵は江戸中期、土佐派某の筆になるという美品である。天地に金泥の雲霞を配した白描画で、色彩はわずかに人物の唇や灯火・篝火あるいは螢火などに朱が点じられるばかりである。およそ源氏絵の豊かな彩色は美点に違いないが、これはこれで上品上質な線描画として実に見応えがある。

なんと言っても四百画面という豊富な場面数が魅力である。現存の画帖・絵巻・屏風絵等に見られる源氏絵の延べ数は二百五十余りと言うから、その圧倒的な「密度」が知られよう。石山寺本に拠れば、「源氏」のどの部分であれ、その文章は対応する図像とともに取り上げることが出来るのである。また四百画面にはその一枚一枚に付箋として画面説明が添付されているから、物語との厳密な対照も可能である。

これらの点に於いて、古典の文章（「源氏物語」）の学習に絵（「源氏絵」）を援用しながら、「見る・話す・聞く」活動を通じて古典学習を展開しようとする立場にとって、石山寺蔵本「源氏物語画帖四百画面」は実に重宝である。



その四百画面の中から、小稿では特に「朝顔（六）」を取り上げた。画帖付箋に拠れば「源紫なかめ給ふ にわに雪まろはしの所也 ちいさきはわらはけてよろこひはしるに扇なともと云所也」という場面である。

数多ある「源氏」の章段の中から特にこの部分を取り上げるのは、この図像の主題が「童女たちの雪遊び」である点に注目したからである。学習者にしてみれば、自らの体験した雪遊びの記憶などを引き合いにして考えることができるわけで、源氏絵に多い恋愛譚や死生観想などに比べれば、登場人物・場面への心情移入が容易であろう。学習者相互の活発な談話も期待できよう。

それは場面読解のためのスキーマ形成を学習者自身に委ねることができるということである。言い換えれば、場面読解に関して煩瑣な注釈を施す必要が少ないということでもある。多すぎる注釈は絵の自在な読み解きを制限しかねないから、この点は実は大きなポイントとなる。重要なことは、画面を自在に展

覧し観察しながら、自分たちの「絵解き」を自在に行ってみよう、物語創造の場に立ち会おう、そのうえで詞書きの表現を味わってみようという態度を啓発することなのである。注釈にしたがって「正確」な解釈を施すことを求めるのではない。このプログラムは、博物館や美術館に陳列されたそれをガラス越しに眺めながら、解説にしたがって文化的な正しい知識を得たり、詞書きの正しい現代語訳や語注を行ったりする活動とは無縁とってよい。

【「朝顔（六）」の教材化】

小稿が提案するプログラムを題して「子供のための古文入門～絵と言葉で楽しむ「源氏物語」の世界～」と称する。小学校六年生を対象とした1時間（45分）完結のプログラムである。その「学習のめあて」は次のごとくである。

学習のめあて

- ①描かれた人々の様子や動きを観察して、現代と似ている点や異なっている点を言葉にしよう。
- ②「源氏物語・朝顔巻」を、みんなとリズムや調子を合わせて音読しよう。

また上記「めあて①」および「②」に従って設定する評価の観点は次のごとくである。

- 絵を観察して、人々の様子や動きがわかった。
- 現代と古代の似ている点について、話したり聞いたりできた。
- 現代と古代の異なっている点について、話したり聞いたりできた。

- みんなとリズムや調子をあわせて古文を音読することができた。
- 音読しながら絵の情景を思い浮かべることができた。
- 光源氏の「ものの見方や感じ方」が分かった。

これらのめあて・評価の観点の設定根拠は、「新指導要領」の指導事項の記述（ア 伝統的な言語文化に関する事項/第5-6学年）である。それは次のごとくである。

- (ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
- (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

ちなみに1-2学年、3-4学年の記述は下記のごとくである。

- (ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

- (ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。
- (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。



プログラムは、「導入→源氏絵の読み解き→源氏物語の音読」の三段階から成る。まず「導入」として取り扱う話題は次のごとくである。ただし、この部分については学習者の実態に応じて柔軟に準備されて良い。

- (1) なぜ古典を勉強するの？
- (2) 「源氏物語」って知ってる？

まず(1)について、たとえば「石のお地蔵様の頭をたたける？ ただの丸石はどう？」と発問してみると良い。「ただの石ならたたけるのに、石のお地蔵様はできない」といった学習者の反応が寄せられよう。そこに畳みかけて「それはどうして？」と発問してみると良い。「ばちがあたるかも…」といった反応が寄せられよう。それを引き取り、「現代人の心の中にも科学的でないものがあるらしい」と気付かせ、さらに「自分の中にある古代の心」に気付かせたい。いわば「内なる異文化を知る・自分自身のことを知る」ために古典を学

ぶのだという「学習の見通し」を明示しておきたい。

ついで (2) について、「源氏物語」が「古文の女王様」と言うべき存在であること、作者が紫式部であること、主人公が光源氏と呼ばれた「イケメン皇子」であること、そして、彼をめぐって繰り広げられる宮廷四季折々の出来事やそこに織りなされた人々の想いを描き出す小説であることなどをまず確認させたい。このあたりの知識については、ちょうど6年生児童は社会科で学習しているから、ざっと思い起こさせる程度で良いだろう。その上で、「人々は源氏物語を絵本として楽しんできた／源氏ほど絵とともに読まれた作品はない」ということを新たに確認させたい。後続の「源氏絵を読む」学習活動につながる興味・関心・意欲の喚起ということである。そのために、たとえば様々な源氏絵に描かれた光源氏の図像を示し、「そのうちどれが光源氏？」と発問してみると良い。「○○が源氏」だとか「××が…」といった学習者の反応が寄せられよう。それを引き取り、「ぜんぶが光源氏であること、それほど多くの画家が自分のイメージを大切にしながら源氏物語を描いてきたこと」などに気付かせ、さらに「人々は源氏物語を絵本として楽しんできた」ということに気付かせたい。



次段階は「源氏絵の読み解き」の学習活動である。まず描かれた「人・時・所」を確認することが必要である。以下のような支援を行って学習活動を展開したい。ちなみにここで用いる話法は visual thinking のそれである。

- (3) まずゆっくり絵を見てごらん。
- (4) ここはどんな所？
 どんな人がいて、どんなことをしている？
 季節が冬だってこと、どこから分かる？

まず (3) のように、「朝顔 (六)」の図像 (後掲図版) をプロジェクター (スライド) 等で拡大投影しながら、学習者にじっくりと観察するよう求めたい。

次いで(4)のように発問して、画面に描かれた「場所」に気付くよう支援を行いたい。この点、原典からすれば場面は「二条院の庭」だが、学習者からは「昔のお金持ち(貴族)の立派なうち」とか「庭がみえる座敷」等の気付きが寄せられればよい。「月影があるので庭に池がある」などの気付きが寄せられれば大いに誉めて良い。

また描かれた「人物」について、「主人らしい男と奥さんがお座敷で火鉢にあたっている」、「召使い(あるいは親戚・姉妹)の女の人たちがカーテン(簾)の陰から外を見ている」、また「三人の女の人(女の子)が庭で何かしている(雪玉を作っている)」、「廊下(縁側)で女の人(女の子)が扇を落とし、振り返って拾おうとしている」等の気付きが寄せられればよい。原典からすれば、二条院の主たる光源氏が紫上と語っている場面であるが、そのようなことにまで気づく必要はない。ただし、この場の「主」ということが見出されてのちは、その人物が光源氏であることくらいは提示して良い。

おそらく、ここまで「火鉢にあたる、雪玉を作る、簾の隙間から外をうかがう」等の気付きがなされていれば、学習者は、画面に描かれた季節が「冬」であることを容易に了解するだろう。そのほかに「木々や庭に降り積もった雪」や「屋根の白さ」等の気付きが寄せられるとさらに良い。

要するにここでのポイントは、「一面の雪景色」を前にした大人と子供それぞれの様子を浮かび上がらせることである。「雪に震える大人」と「雪が嬉しい子供」という今日にも通じる冬の情景について、学習者から気付きが寄せられれば良い。この点が、「めあて」にも掲げる「現代と似ている点」である。



「源氏絵の読み解き」の後半として、「現代と異なっている点」を浮かび上がらせるために、以下のような支援を行って学習活動を展開したい。

(5) この場面は「夜」なんだって。どこから分かる？

(6) 雪玉はどんな風に見えるだろうか？

～人々はどんな想いでそれを見ただろうか？

(5) のように発問すれば、学習者は容易に画面右上に描かれた月に気付くだろう。さらに庭の池に月影が映ることに気付きましょう。これが「夜」の場面であることが確認されれば良い。

さて、このプログラムにとって (6) の発問が重要である。それは、月光のなかで雪玉がどのように見えるかを想像させるための支援である。学習者からはいろいろの発言が寄せられようが、「ちょうど大きな月のよう」とか「空の月と相照らし合う地上の月」といった趣意の表現に導くことができると良い。ぽっかりと空に浮かぶ月、池水に映る月影、そして一面の雪景色の中、もう一つの大きな「月」が庭前にキラキラと浮かび上がるというような幻想的な美しさが学習者の心象として形成されねばならない。それは、白銀と漆黒によって描き出される幻想的な月神の降臨に思いをはせることでもある。

それこそまさに、その場にいる人々の心情を想像することでもある。要は、今日普通の雪遊びには感じ取りにくい「神聖な趣き」がその場に充ち満ちることについて、学習者が気付くように導きたい。この点、学習者の自発的な気付きを期待するのが難しいだろうから、指導者の積極的な誘導が必要だろう。必要に応じて、「かまくら」など今日に伝わる冬季の伝統的祭礼を例示しても良い。

ちなみに本文では、月と雪とがともに真白く輝いているさま（「月は限なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに」）を描き出し、それを見た源氏が、自ずから来世のことに思いを及ぼした（「身にしみて、この世の外のことまで思ひ流され」ということを述べている。指導者はこの本文の描写に留意しながら、学習者に対する積極的な誘導を行うことになるだろう。



ここまでの「源氏絵の読み解き」の学習活動について、次のような項目によって自己評価させた上で、次の段階「源氏物語の音読」に進むことにする。

- 絵を観察して、人々の様子や動きがわかった。
- 現代と古代の共通点について、話したり聞いたりできた。
- 現代と古代の相違点について、話したり聞いたりできた。

「源氏物語の音読」については、「朝顔巻」から当該部分を提示する。ここまでと同様にプロジェクター等で拡大提示するとともに、プリントとして配布もする。なお望むらくは前時までに配布して、事前に音読させておきたい。

その本文は、「源氏絵の読み解き」の学習内容とより整合性を高めるため、私に抜粋・改変したものを用意する。また表記や振り仮名・送り仮名の類についても、学習者の実態に合わせて対処するものとする。具体的には以下のごとく本文を用意した。なお学習者用の提示画面や配布プリントについては、「総ルビ」とする*10。

源氏物語 朝顔巻より

雪のいと降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹のけじめおかしく見ゆる夕ぐれに、人の御かたちも、光まさりて見ゆ。

(源氏)「人の心を映すめる花もみじのさかりより、冬の夜の澄める月に光あいたる空こそ、あやしく身にしみて、この世の他のことまで思い流されて。」

月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、童べおろして雪まろばしさせ給う。おかしげなる姿、月に映えて、いとけざやかなり。小さきはよろこび走るに、扇なども落として、うち解け顔おかしげなり。

全体として三つの部分に別れるよう設定している。

まず第一部分の音読を行う。始めるにあたっては「音読時の留意事項」は確認しておきたい。ちなみに論者は「くまのあいうえお」と称して、「口の形、間の取り方、相手を見て、一生懸命、後ろまで聞こえる声、笑顔で生き生き、

おしまいまではっきり」等のことがらに気をつけさせている。

源氏物語 朝顔巻より

雪のいと降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹のけじめおかしく
見ゆる夕ぐれに、人の御かたちも、光まさりて見ゆ。

まず一度目の音読を行った後、「源氏絵でどんな場面だったか」を思い出すように発問し、必要に応じて学習者の発言を待つものとする。特に「雪のいと降り積もりたる上に」や「夕ぐれ」等の言葉と絵のイメージが重なるように促す。その上で、さらに二、三度の音読を行う。なお、文章の提示方法に工夫があっ
てい良い。たとえばパワーポイントによるアニメーション処理など。

(源氏)「人の心を映すめる花もみじのさかりより、冬の夜の澄める月に
光あいたる空こそ、あやしく身にしみて、この世の他のことまで思い流さ
れて。」

次いで第二部分の音読を行う。一度目の音読の後、「光源氏の気持ちはどの
ようだろうか」を思い出すように発問し、必要に応じて、学習者の発言を待つ
ものとする。特に「あやしく身にしみて」や「この世の他のことまで思い流さ
れて」等の言葉と絵のイメージが重なるように促す。その上で、さらに二、三
度の音読を行う。

月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、童べおろして雪
まろばしさせ給う。おかしげなる姿、月に映えて、いとけざやかなり。小
さきはよろこび走るに、扇なども落として、うち解け顔おかしげなり。

次いで第三部分の音読を行う。一度目の音読の後、「場面の様子や童女たち
の様子は、源氏絵ではどんなだったか」を思い出すように発問し、必要に応じ
て学習者の発言を待つものとする。特に「月は隈なく」や「ひとつ色に見え渡
され」、「雪まろばし」、「小さきはよろこびはしる」等の言葉と絵のイメージが
重なるように促す。その上で、さらに二、三度の音読を行う。

最後に、全文を通した音読を一度だけ行ってプログラムのまとめとする。そののち次のような項目によって自己評価を行う。

- みんなとリズムや調子をあわせて古文を音読することができた。
- 音読しながら絵の情景を思い浮かべることができた。
- 光源氏の「ものの見方や感じ方」が分かった。

【おわりに】

新指導要領が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」として提示した「小学校国語科における古典指導」について、以上のような教育プログラムを提案してみた。言わば、「親しみやすい古文」について、絵を援用しながら「内容の大体を知り」、その上で「音読すること」を実現しようとするものであり、さらに「昔の人のものの見方や感じ方を知ること」をも達成しようとするものである。諸賢のご批評をお願いする次第である。

なお、本年11月には、福岡市立三宅小学校の6年生児童4クラスを対象として、論者自らこのプログラムの授業実践を試行させていただく予定である。その場におけるリフレクション報告等については、また別稿として明らかにしたいと思う。

【注】

- *1) 参考文献 (23)
- *2) 参考文献 (1) ～ (10) (12) (15) (16) (19) (20) (24) (33) など。
- *3) 参考文献 (25) ～ (32) (34) (35)
- *4) 「対事意識、対自意識、対他意識、体現意識」の表現は参考文献 (13) (14) などによる。
- *5) このプログラムにとって visual thinking の方法論は重要である。visual thinking という用語じたい容易な表現であるから、これを用いる論者によって、微妙に異なった意味で使われる傾きがあるようだ。が本来は、主として美術鑑賞教育の研究と実践に意を注いでいる米国 NPO<Visual

Understanding in Education (VUE), 1995 設置>の用語であると理解しておきたい。VUE では正確には<Visual Thinking Strategies (VTS)>という。主として elementary school の児童とその教師を対象とした鑑賞教育プログラムである。理論面は教育心理学者である Housen, Abigail の鑑賞教育に関する研究（主としてニューヨーク近代美術館の教育プログラムの検証作業にかかる）に拠り、具体的なカリキュラムは Housen とともに美術館学芸員である Yenawine, Philip が策定した。およそ 80 年代後半には完成しており、90 年代の初頭から米国、ロシア、東欧、中央アジアの学校等及び美術館等で実践されていったものごとくである。参考文献 (1) ~ (8) はその方法論の具現であり、またその効用を分析したのが参考文献 (9) (10) である。

*6) 参考文献 (11) (17) (18) (21) (22) (36)

*7) 源氏本文の引用については『新日本古典全集』（小学館）を参照した。

[参考文献]

- (1) A.アレナス (1998) 『なぜ、これがアートなの? Vol.1』(淡交社 VHS)
- (2) A.アレナス (1998) 『なぜ、これがアートなの? Vol.2』(淡交社 VHS)
- (3) A.アレナス (1998, 福のり子訳) 『なぜ、これがアートなの?』(淡交社)
- (4) A.アレナス (1999, 木下哲夫訳) 『人はなぜ傑作に夢中になるの—モナリザからゲルニカまで』(淡交社)
- (5) A.アレナス (2001, 木下哲夫訳) 『みる・かんがえる・はなす—鑑賞教育へのヒント』(淡交社)
- (6) A.アレナス (2005, 木下哲夫訳) 『M I T E ティーチャーズキット 1 (小学校 3・4 年生)』(淡交社)
- (7) A.アレナス (2005, 木下哲夫訳) 『M I T E ティーチャーズキット 2 (小学校 5・6 年生)』(淡交社)
- (8) A.アレナス (2005, 木下哲夫訳) 『M I T E ティーチャーズキット 3 (中学生)』(淡交社)
- (9) 上野行一 (2000) 「アメリカ・アレナスの鑑賞教育 日本におけるギャラ

- リー・トークとレクチャーの分析を中心に」(「大学美術教育学会誌」第32号)
- (10) 上野行一(2001)『まなざしの共有ーアメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶー』(淡交社)
 - (11) 片桐弥生(1992)「石山寺蔵『白描源氏物語画帖』についてー源氏絵場面集の一例として」(風間書房『講座平安文学論究8』)
 - (12) 全国大学国語教育学会編(1987)「国語教育のための「映像」の位置」(「国語科教育」第35集)
 - (13) 高橋俊三(1993)『対話能力を磨くー話し言葉の授業改革』(明治図書出版)
 - (14) 高橋俊三(2000)「話し合うことの授業づくり」(明治図書出版「教育科学国語教育」No.587)
 - (15) 丹青総合研究所文化空間研究部(1987)『ミュージアムワーク・シート博物館・美術館の教育プログラム』
 - (16) DOME 編集室(1999)「川村記念美術館『なぜ、これがアートなの?』展が仕掛けたもの」(「ミュージアムマガジン ドーム」42号)
 - (17) 中野幸一(2005)『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』(勉誠出版)
 - (18) 中野幸一(2005)「現存最多の四〇〇図 石山寺蔵『源氏物語画帖』」(「日本古書通信」70-8)
 - (19) 日本放送協会(1999)『最後の晚餐, ニューヨークに行く』(ETVカルチャースペシャル, 1999.9.4放送)
 - (20) 林寿美ほか(1998)『なぜ、これがアートなの?展 鑑賞教育の手引き』(川村記念美術館ほか)
 - (21) 久下裕利(1992)「物語絵を読むーその五, 土佐派の源氏絵(3)」(「学苑」629)
 - (22) 日向一雅(2005)「鷲尾遍隆監修・中野幸一編集『石山寺蔵四百画面源氏物語画帖』」(「解釈と鑑賞」70-10)
 - (23) 藤原マリ子(2004)「古典教育の再生を目指してー高校生への意識調査をもとにー」(「国文学言語と文芸」第121号)
 - (24) 古田雅憲ほか(2001)「国語科教育における「絵解き」の意義と指導ーさ

- し絵を読む授業の取り組みー」(「語学と文学」37号)
- (25) 古田雅憲 (2002)「新田文庫蔵 百鬼夜行絵巻について」群馬大学図書館報 No.286 (群馬大学附属図書館)
- (26) 古田雅憲 (2002)『『信貴山縁起絵巻・尼君巻』授業化の構想ー絵巻を通じて古典に親しむー」(「語学と文学」38号)
- (27) 古田雅憲 (2003)「<絵解き>教材のねらいと特徴」(「月刊国語教育」2003.4月号)
- (28) 古田雅憲 (2003)「<絵を読む>から<古文を読む>へ」(「月刊国語教育」2003.5月号)
- (29) 古田雅憲 (2004)「新田岩松家旧蔵『百鬼夜行絵巻粉本』についてー猫絵の殿様の画業を理解するために」(「語学と文学」40号)
- (30) 古田雅憲 (2004)「附属図書館の新しい取り組みー特別企画展・親子で楽しむ猫絵展に寄せて」(LINE 群馬大学図書館報 No.291, 2004.9)
- (31) 古田雅憲 (2005)『『林原本平家物語絵巻・殿上闇討事』授業化の構想」(「群馬大学教育実践研究」22号)
- (32) 古田雅憲 (2005)「企画展『第二回・親子で楽しむ猫絵展～<故事人物画と物語絵>編』に寄せてー」(LINE 群馬大学図書館報 No.293, 2005.10)
- (33) 古田雅憲 (2006)「ビジュアル・シンキングの国語教育への援用について」(「西南学院大学人間科学論集」2巻1号)
- (34) 古田雅憲 (2007)「幼児教育における古典絵画の援用についてー群大図書館蔵「新田岩松家旧蔵粉本」の学習材化ー」(「語学と文学」43号)
- (35) 古田雅憲 (2007)「映像メディアを援用した『扇的』の授業提案～幼児・児童のための古典教育を展望しながら～」(「西南学院大学人間科学論集」3巻1号)
- (36) 三田村雅子, 河添房江 (2006)『描かれた源氏物語』(翰林書房)

